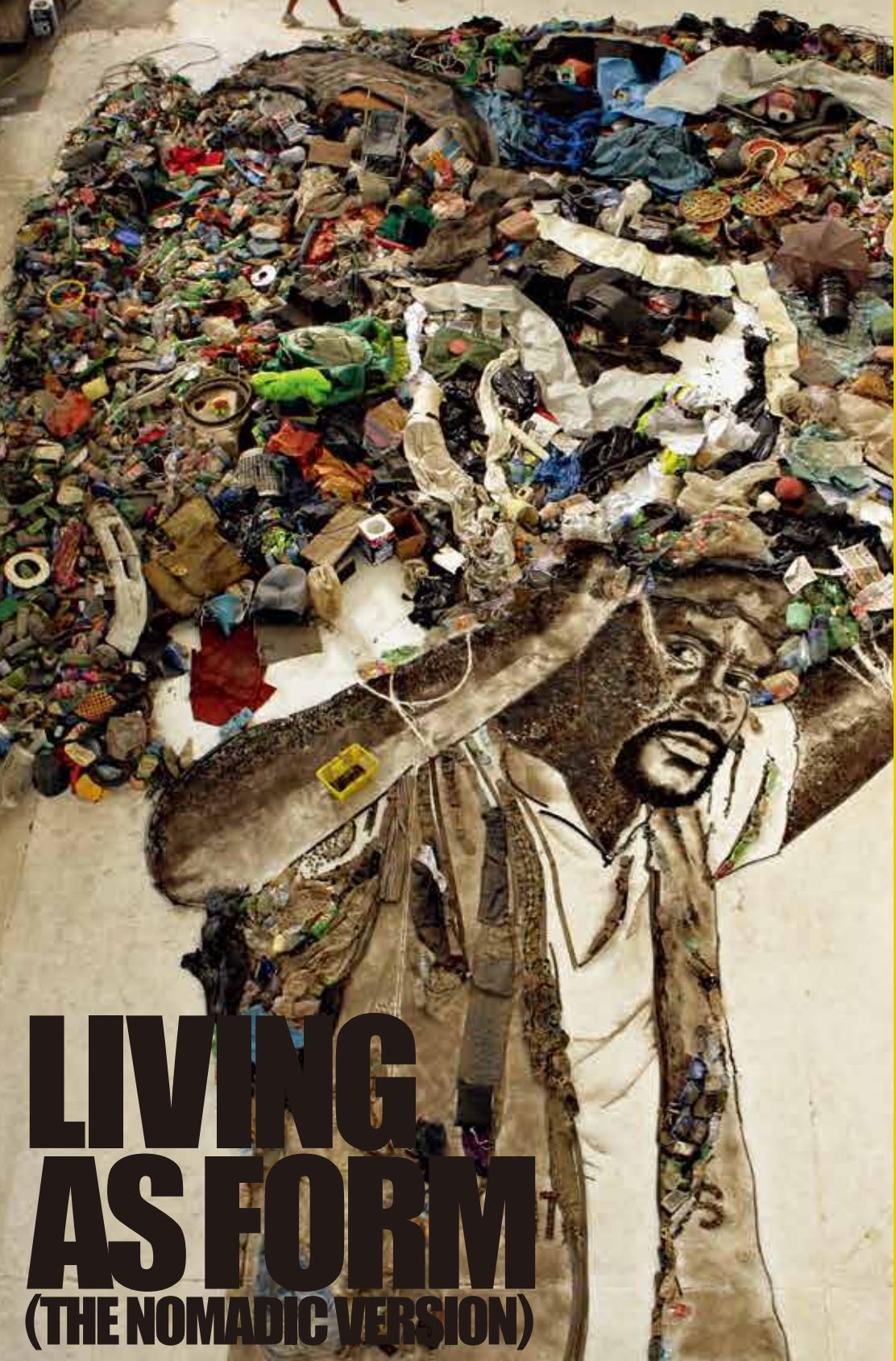


リビング・アズ・フォーム（ノマディック・バージョン）

# ソーシャリーエンゲイジド・アートという潮流



# LIVING AS FORM (THE NOMADIC VERSION)

20 Years of  
Socially Engaged Art

リビング・アズ・フォーム(ノマディック・バージョン) ソーシャリー・エンゲイジド・アートという潮流  
Living as Form (Nomadic Version) 20 Years of Socially Engaged Art

会期：

2014年11月15日（土）～28日（金）

会場：

アーツ千代田 3331 [3331 Arts Chiyoda] B104

主催：

特定非営利活動法人アート&ソサイエティ研究センター

クリエイティブ・タイム [Creative Time]

インディペンデント・キュレーターズ・インターナショナル [Independent Curators International (ICI)]



助成：

公益財団法人朝日新聞文化財団

特定非営利活動法人 Japan Cultural Research Institute

環境芸術学会

協力：

日本大学理工学部建築学科佐藤慎也研究室

特定非営利活動法人クリエイター育成協会

白水デジタルプリント工房

オリジナルの「リビング・アズ・フォーム」への主要支援団体

アンバーグ財団／リリー・オーキンクロス財団／デンマーク領事館／アンドリュー・W・メロン財団／

モンドリアン財団／全米芸術基金／ロックフェラー兄弟基金

ノマディック・バージョンへの支援団体

ホレス W. ゴールドスミス財団／アンディ・ウォーホル美術財団／ロバート・スターリング・クラーク財団／ICI 評議員会

展覧会「リビング・アズ・フォーム」で紹介したプロジェクトは、以下のキュレーター、ライター、アーティスト、歴史家のグループが選考しました。

Caron Atlas, Negar Azimi, Ron Bechet, Claire Bishop, Brett Bloom, Rashida Bumbray, Carolina Caycedo, Ana Paula Cohen, Common Room, Teddy Cruz, Sofía Hernández Chong Cuy, Gridthiya Gaweewong, Hou Hanru, Stephen Hobbs and Marcus Neustetter, Shannon Jackson, Maria Lind, Chus Martínez, Sina Najafi, Marion von Osten, Ted Purves, Raqs Media Collective, Gregory Sholette, SUPERFLEX, Christine Tohme, Bik Van der Pol, Sue Bell Yank

日本展キュレーター：

秋葉美知子、菊池宏子、工藤安代、清水裕子

インターン：

板垣美香、佐藤彩乃、中畦千明、山本れいら

展示デザイン：

日本大学理工学部建築学科佐藤慎也研究室

佐藤慎也、高野和哉、小笠舞穂、緒方彩乃、河村修一、川村洋右、黒田陽二郎

ごあいさつ

本展覧会は、日本でこれまでほとんど知られることがなかった海外のソーシャリー・エンゲイジド・アート [Socially Engaged Art] を紹介する初の試みです。

ソーシャリー・エンゲイジド・アートは、アートワールドの閉じた領域から脱して、現実の世界に関わり、人びとの日常から既存の社会制度まで、何らかの“変革”をめざすアーティストたちの活動を総称するもので、参加・対話のプロセスを含む、アクティブで多様な表現活動です。このタイプのアートは 1990 年代初頭から米国を中心として活発化し、現在では世界中に拡大しています。

一方、日本でも 2000 年以降、主に地方都市や農山漁村地域などで、地域の再生や活性化を目的とした「アートプロジェクト」が活発に行われています。しかし、その言葉の定義はあいまいで、アーティストの社会的役割やアートワークとしての意味や価値についての深い議論もなされないまま、地域の絆づくりやツーリズム促進のツールとなっている事例が数多く見られます。本展覧会は、そういった現状に対し、いま世界各地で実践されているソーシャリー・エンゲイジド・アートを紹介することで、日本のアートプロジェクトをめぐる議論を活発化し、改めてその社会的意味や方法論を考えるきっかけになることを意図して開催いたします。

ソーシャリー・エンゲイジド・アートは、都市計画や福祉、教育、さまざまなコミュニティ活動や政治運動を美術や演劇といった創造的、象徴的な表現と結びつけ、これまで見えなかったものを可視化したり、気づかなかつた価値を明らかにすることによって社会に現実的な変化をもたらそうとする、ハイブリッドで分野横断的な試みだといえます。本展覧会が、こうした社会的実践としてのソーシャリー・エンゲイジド・アートのチャレンジ・パワーを理解していただく機会となれば幸いです。

本展は、ニューヨーク市を拠点として過去 40 年にわたって、社会と関わるアート活動をプロデュースしてきた NPO 「クリエイティブ・タイム [Creative Time]」が、2011 年秋に、世界のソーシャリー・エンゲイジド・アートをテーマに、Nato Thompson 氏のキュレーションによってニューヨーク市で開催した画期的な展覧会「リビング・アズ・フォーム [Living as Form]」の巡回展（縮小版）で、東京が世界最後の開催地になります。

本展開催にあたり、参加アーティストの方々、クリエイティブ・タイム [Creative Time]、インディペンデント・キュレーターズ・インターナショナル [Independent Curators International (ICI)] をはじめ、多くの方々のご協力をいただきました。ここに心よりお礼申し上げます。

特定非営利活動法人アート&ソサイエティ研究センター

「Living as Form」とは

本展覧会のタイトル「リビング・アズ・フォーム」は、スイスのキュレーター、ハラルド・ゼーマンが 1969 年に企画した展覧会「態度が形になるとき [When Attitudes Become Form]」からヒントを得ている。クンストハレ・ベルンで行われたこの展覧会は、ヨーゼフ・ボイス、ウォルター・デ・マリア、ロバート・モリス、ブルース・ナウマンら、伝統的なアートのフォーム（表現形態）に挑戦するアーティストたちが参加し、コンセプチュアル・アート、ランド・アート、ミニマリズム、アルテ・ポーヴェラなど当時の新しいアート・ムーブメントを紹介する画期的なものとなった。

それから約半世紀。フォームはさらに従来の芸術の枠から解放され、人々の生活、生き方、アクティビズムそのものがフォームとなって、現実社会に対して問題を投げかけ、提案をし、批評を求めている。「リビング・アズ・フォーム」は、そうした社会的実践活動がアートの表現形態と密接に結びついたプロジェクトの総称として、ゼーマンの仕事を 21 世紀につなぐコンセプトを提示する展覧会である。

単行本 | Living as Form: Socially Engaged Art from 1991-2011

Edited by Nato Thompson, Co-published by Creative Time Books, New York, The MIT Press, Cambridge, Massachusetts

- 01** リック・ロウ **Rick Lowe**
- 02** ヴォッヘンクラウズール **WochenKlausur**
- 03** スザンヌ・レイシー **Suzanne Lacy** 
- 04** アローラ&カルサディーラ  
**Jennifer Allora and Guillermo Calzadilla** 
- 05** アパルショップ **Appalshop** 
- 06** ウィメン・オン・ウェイブ **Women on Waves** 
- 07** テレルヴォ・カルレイネン&オリヴァー・コフタ=カルレイネン  
**Tellervo Kalleinen and Oliver Kochta-Kalleinen** 
- 08** ママリアン・ダイビング・リフレックス  
**Mammalian Diving Reflex** 
- 09** アイ・ウェイウェイ **Ai Weiwei** 
- 10** ヴィック・ムニース **Vik Muniz** 
- 11** バスラマ **Basurama** 

は動画の作品です。各ページでその概要を紹介しています。

クリエイティブ・タイム  
Creative Time

1973年にニューヨーク市で設立された非営利芸術団体。過去40年にわたって、都市の公共空間を舞台に、アーティストのチャレンジングな創造活動をプロデュースしてきている。テンポラリーなパブリック・アート・プロジェクトを中心に、展覧会、シンポジウム、出版事業なども積極的に展開。2009年から「アートと社会正義の交差点の探究」をテーマとするカンファレンス Creative Time Summit を毎年開催し、よりよい社会変革をめざすアート活動について議論するとともに、この分野に顕著な貢献をしてきたアーティストを表彰する場（レオノア・アンバーグ・アート & ソーシャルチェンジ賞）として、アーティスト、建築家、都市計画家、社会活動家などに広範な議論のプラットフォームを提供している。<http://creativetime.org/>

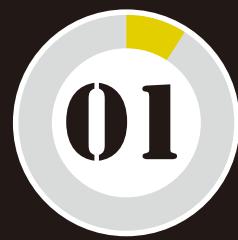
インディペンデント・  
キュレーターズ・インターナショナル  
Independent  
Curators International (ICI)

1975年創立の非営利芸術団体。キュレーター、アーティスト、美術館、ギャラリーなどのネットワーキングを通じて、現代アートの展覧会やイベントの巡回版を世界各地で開催する活動を中心に、新しいアートのインフラストラクチャー構築をめざしている。<http://curatorsintl.org/>

# リック・ロウ Rick Lowe プロジェクト・ロウ・ハウス Project Row Houses

1993-

テキサス州ヒューストン(アメリカ合衆国)



1993年、アーティストのリック・ロウは、低所得のアフリカ系アメリカ人が多く住むテキサス州ヒューストンの第3区の通りで、打ち棄てられ、取り壊される予定だった22戸のショットガンハウス(※)をアーティスト仲間の協力を得て買い取った。彼は何百人のボランティアの協力を引き出して、建物の保存に乗り出した。通りの清掃から始め、ファサードの再生、古びた家の内装の修復……。このアーティビスト集団はだんだん大きくなり、全米芸術基金や民間財団から助成金を得て、暗く荒廃した細長い土地を、アーティスト・イン・レジデンス施設、ギャラリー、公園、商業ゾーン、庭園、18歳から26歳の若いシングル・マザーが自立するまでの一時的住居を含む、いきいきした一画に変えていった。《プロジェクト・ロウ・ハウス》と呼ばれるこの取り組みは、コミュニティの建物と歴史を復元するとともに、不可欠な社会サービスを住民に提供している。今では非営利組織となったこのプロジェクトは、長期間にわたるコミュニティ・エンゲイジド・プログラムの象徴として、世界の美術館やアートイベントの会場で展示紹介されるようになっている。

《プロジェクト・ロウ・ハウス》を開始して以来、リック・ロウ(2010年にクリエイティブ・タイムの「レオノア・アンバーグ・アート & ソーシャルチェンジ賞」を受賞)は、ソーシャルチェンジの触媒としてのアートを特別なものと位置づけてきた。ロウは「チェンジ」という言葉を注意深く考えている。「“チェンジ”はこれまで、進歩的なアジェンダとみなされてきた。しかし、言葉は変化しており、明瞭さは失われている」。プロジェクトのきっかけは、あるとき彼が一人の高校生から、「モノとしてのアート作品を作るのは社会正義の探求のために有効なのか?」と問いかげられたことだった。これに刺激を受けたロウは、「アートは現実の社会状況を向上させる力を持つ」と信じるアーティスト、ジョン・ビガーズの活動に目を向け、第3区への介入を決心した。

《プロジェクト・ロウ・ハウス》は、当初の22戸から40戸へ拡大し、複数の展示場、文芸センター、マルチメディア・パフォーマンス・アート・スペース、オフィス、低家賃住宅その他、さまざまなアメニティを包含している。2003年には、低所得者向けの賃貸住宅を開発・斡旋するRow House Community Development Corporationを設立した。

※ショットガンハウスとは、ワンルームの幅しかない細長い間取りの家で、玄関から拳銃を撃つと、そのまま裏口まで弾が飛んでいくということからこの名がついた。19世紀半ばから1920年代にかけてアメリカ南部で数多く建てられた住宅形式。



1961年、アラバマ州生まれ。コロンバス・カレッジとテキサス・サザン大学で、絵画・ビジュアルアーツを学ぶ。

20代半ばからテキサス州ヒューストンで、社会問題をテーマとした巨大絵画や切り抜き彫刻を制作していたが、1990年代初め、高校生の一言をきっかけに、ドイツのアーティビスト・アーティスト、ヨーゼフ・ボイス(1921-1986)の“社会彫刻”的考え方や、テキサス・サザン大学美術学部の創設者で、アフリカ系アメリカ人の生活や文化を壁画に描いた画家ジョン・ビガーズ(1924-2001)に学び、コミュニティの社会的、経済的、文化的ニーズに直接応える活動に方向転換した。1993年に開始した《プロジェクト・ロウ・ハウス》は、アーティストが主導する持続可能な地域再生モデルとして高く評価され、ロウは、2002年に「ハインツ賞アーツ&ヒューマニティ部門」、2010年に「レオノア・アンバーグ・アート&ソーシャルチェンジ賞」を受賞。2014年9月には、“天才賞”と呼ばれるマッカーサー・フェローに選ばれ、625,000ドルの助成金を獲得した。

写真右下：  
左の人物がリック・ロウ



## ヴォッヘンクラウズール WochenKlausur

### ホームレスのための医療バン Medical Care for Homeless People

1993-

ウィーン(オーストリア)

8人のメンバーからなるオーストリアのアーティストグループ。グループ名はドイツ語で「集中して議論する週間」を意味する。1993年活動開始以来、世界各国の芸術機関の招きに応え、アーティスティックな創造性を社会への“介入”として用い、たとえ小さくとも、社会政治的な欠陥を改善するのに役立つ具体的な提案を行っている。

1999年11月から2000年1月にかけては、福岡市のミュージアム・シティ・プロジェクトのアーティスト・イン・レジデンスとして、地域住民と協働で教育問題に関するリサーチや討論を行い、小学校における新しい授業の仕組みの提案につなげた。最近では、2013年に、英国グラスゴーの貧困地区で、職のない女性たちが自ら起業することを支援。この地区の劣悪な食生活の改善をめざして、新鮮な野菜の詰め合わせに簡単なレシピを添えた“ミール・パッケ”を販売する実験的店舗を作った。

オーストリアの人々は、国民皆保険制度のもとで医療サービスを受けている。しかし、それは住民登録に基づく非常にお役所的なシステムのため、ホームレスは対象にならない。ウィーンを拠点とするコレクティブ、ヴォッヘンクラウズールは、ウィーン分離派会館の現代アート・ギャラリーでの展示を依頼されたとき、会館に近く、いつも多くのホームレスが集まっている広場、カールスプラットツで、無料の移動クリニックを開設する計画を立てた。そのクリニックは、基本的な医療機材を備えたパンの前で診療するというものだった。パンは試作車としてデザインされ、1993年当初は、11ヵ月間のみ稼働させる予定だった。それがいまだに、ウィーン市内の公共広場を回って毎日移動しており、月600人以上に医療サービスを提供している。

この8人のアーティストによるコレクティブは、民間スポンサーから調達した7万ユーロを使って、パンや医療器具・備品を買い、公共の場で診療行為を行うために必要なライセンスを取得した。ところが、医師に支払う給料が大問題になった。なぜなら、唯一見込みのある資金源の市政府が、参加を拒んだからだ。しかし、ヴォッヘンクラウズールは屈せず、ドイツのレポーターの協力を得て、ウィーン市長にインタビューしたところ、市はしぶしぶ要求を認め、以来、2人の医師のフルタイム勤務を支えている。

《ホームレスのための医療バン》は、ヴォッヘンクラウズールが過去20年間に行ってきた約40件に及ぶ真摯な試みの第一号である。それらはみな、差し迫った問題に直接インパクトを与えるよう考案されてきた。この8人組は、美術館などアート機関の招きに応じて各都市に行き、地元の新聞を読み、住民と話し、そして、決められた期間内に実行できる緻密な行動計画を立てる——持続する変化を起こすことを目的に。そのプロジェクトは、チューリヒの売春婦たちのための年金制度づくりから、シカゴの美術館・劇場から廃棄された素材をホームレス収容施設やスープキッチンの家具に再生する試みなど、多岐に及んでいる。



# スザンヌ・レイシー Suzanne Lacy ルーフ・イズ・オン・ファイア The Roof is on Fire

1994

カリフォルニア州オークランド(アメリカ合衆国)

03

1994 年のある午後、カリフォルニア州オークランドの高校生 220 人が、屋上駐車場に止めたクルマに座って、暴力、セックス、ジェンダー、家族、人種について語り合っていた。10 代の若者たちが、台本など無しで率直に話す中、1,000 人近い観衆（大勢のリポーターや撮影班も含まれていた）が、クルマからクルマへ歩き回り、車体にもたれかかったり、のぞき込んだりしながら、開いた窓を通して彼らの会話を聞いた。その結果として、このパフォーマンスの記録映像《ルーフ・イズ・オン・ファイア》が制作され、多くの地方テレビ局と CNN で全米にオンエアされた。

オークランドのティーンエイジャーは、以前からメディアの注目を浴びるのに慣れていたが、その報道はたいてい、暴動、暴行や警察との衝突にからんで、ネガティブに描写されたものだった。しかし、このイベントは、アーティスト、スザンヌ・レイシーが TEAM (Teens, Educators, Artists, Media workers) と名付けたグループとともに企画したもので、若者たちが厄介者ではなく市民として登場する、プラス志向のメディア・スペクタクルとして構想された。レイシーは、5ヵ月間毎週、教師とティーンズ（その中には保護観察中の若者もいた）に会い、彼らにとって重要な問題を議論した。そして、市民運動のリーダーに向けて、オークランドの未来における若者の役割についてのメッセージを作り上げた。《ルーフ・イズ・オン・ファイア》は、そういったディスカッションで得られた重要な論点はもちろん、人々に誤解を与えるメディア報道に、力強い、コミュニティ主導のアクションで対抗するという、レイシーが長年取り組んできみッションを反映するものになった。1970 年代から彼女は、ニュース報道で広まっていることは異なる解釈や物語を提供するパフォーマンスを創作してきた。たとえば、ロサンゼルスの市庁舎の階段で行った《追悼と怒りと》は、1977 年 12 月に起こった女性 10 人連続殺人事件の報道に応答する公開の儀式だった。もっぱら暴力の無差別性に焦点を合わせたメディア報道に対し、レイシーが演出したパフォーマンスは、行動の呼びかけであり、フェミニストの観点から連続殺人事件をとらえ直したものだった。



The Roof is on Fire  
0:51:48

1994 年にカリフォルニア州オークランドで撮影されたドキュメンタリー。10 代の若者が数名のグループに分かれて、ビルの屋上駐車場に止めたクルマの中で社会や自分たちの抱える問題について真剣に討論する様子を記録している。セックス、暴力、家族、将来……。難しい話題にもかかわらず、彼らは個人的にその問題に対する考え方を持っています。日没とともに始まったこのディスカッションは徐々にヒートアップしていく。オーディエンスの大人们はその様子を興味深く聞く。若者たちが、自分たちに対するステレオタイプな見方に怒りや不満を感じており、中には諦めた若者もいることを改めて理解する。



1945 年カリフォルニア生まれ。カリフォルニア州立大学で心理学を学んでいた 1970 年、ジュディ・シカゴのフェミニスト・アート・プログラム (FAP) に参加したことをきっかけにアーティストの道へ。1971 年に FAP がカリフォルニア芸術大学 (Cal Arts) へ移転したためレイシーも移り、そこで教鞭をとっていたアラン・カプロウから強い影響を受けた。

1970 年代初めからアーティスト、アクティビスト、教育者、著述家として、実践と理論の両面で活動。現在、ロサンゼルスの Otis College of Art and Design の大学院「Public Practice」コースの主任教授をつとめている。フェミニストである彼女のアートワークは、レイプ、バイオレンス、高齢化などポリティカルなテーマを扱っているが、メディアでの報道を意識し、視覚的に印象的なパフォーマンスが特徴。また、パブリックアートに関する論考でも、1995 年の編著書『Mapping the Terrain』で“ニュー・ジャンル・パブリック・アート”という概念を提示したことでも知られる。

代表的なパフォーマンスとしては、ロサンゼルスのショッピングモールで、壁に貼った大きな地図上にレイプの起きた地点を示す赤いスタンプを毎日押していく《5 月の 3 週間》(1977)、ミネアポリスの商業ビルのアトリウムに幾何学的に配置された赤と黄のクロスを掛けた 4 人用のテーブルで、黒い服を着た 430 人の高齢女性が自分たちの経験や問題を語り合い、それを観客がバルコニーから眺めるという壮大なスペクタクル《クリスタル・キルト》(1987) などがある。



アローラ&カルサディーラ  
Jennifer Allora and Guillermo Calzadilla  
チョーク TIZA (Lima)  
1998-2006  
リマ(ペルー) 他世界各地

ジェニファー・アローラは1974年ペンシルベニア州フィラデルフィア生まれ。ヴァージニア州リッチモンド大学、マサチューセッツ工科大学で学ぶ。ギレルモ・カルサディーラは1971年キューバ、ハバナ生まれ。プエルトリコ造形美術学校(Escuela de Artes Plásticas)、ニューヨーク州バーード大学で学ぶ。

2人は、イタリアのフィレンツェ留学中に出会い、1995年から共同制作を開始し、現在プエルトリコのサンファンを拠点に活動している。彼らは、ビデオ、サウンド、インスタレーション、彫刻、パフォーマンスなどさまざまな手法を用い、ユーモアや詩情を込めながら、社会政治状況に介入する作品を作ってきた。特に、サウンドは重要な要素になっている。プエルトリコの東にある、かつて米軍の爆撃訓練場があり現在は観光地となっているヴィエケス島を舞台とした《Returning A Sound》は、トランペットを取り付けたバイクで「ブー、パー」と音を立てながら島を一周するビデオ作品(2004)。米国代表として参加した2011年のヴェネチア・ビエンナーレでは、泥で作った実物大のカバの上に人が座って新聞を読み続け、記事に社会的不正義を感じた時に首から下げる笛を吹くというパフォーマンス彫刻《Hope Hippo》を発表した。

ジェニファー・アローラとギレルモ・カルサディーラは、長さ5フィート(1.5m)の巨大なチョークを12本、リマ、パリ、ニューヨークの公共広場に置いた。それは、つかの間のモニュメントで、時間とともに粉々に碎けて小さな破片になり、ついには溶けてしまう。アーティストは、人々を誘い、チョークのかけらを使って、地面に、落書きでも、自己表現でも、好きなやり方でメッセージを書くよう促した。こうして、チョークは、つかの間の創造を可能にする素材に変化する。リマでは、アローラ&カルサディーラは政府ビルのすぐ前にチョークを置いたので、通行人は駆り立てられ、隣接する広場を、国を批判するメッセージのあふれる大きな黒板に変えてしまった。この行動は即興の平和的な抗議行動に発展し、やがて役人たちが広場に集まってきた。ついに、盾を構えヘルメットをかぶった警備当局者が、チョークを没収し、扇情的な政治的意見を地面から洗い流した。

プエルトリコを拠点とするアローラ&カルサディーラは、2011年のヴェネチア・ビエンナーレに米国代表で参加した。米国代表としては初のパフォーマンス・アーティストであり、共同で制作するアーティストだった。1990年代末から、彼らは彫刻、パフォーマンス、ビデオを使って、日常的なモノを政治の道具に変容させてきた。彼らのプロジェクトは、マーク・メイキング(印を残す)行為、つまりいかに一時的アクションが永続的な効果を生むかを探求するものが多い。



CHALK (LIMA) 2002  
0:15:29

スペイン語でチョークのことをtizaという。このイベントは、ペルーの「リマ・ビエンナーレ」のプログラムとして2002年4月17日にリマのサンタローザ広場で行われた。巨大なチョークを広場や通りに置き、最初それを小さく碎いて、アスファルトの地面に何かを書き、それで何をするのか示しながら、一般市民が個人的なメッセージを書くよう誘導する。ビデオには時間の経過にそった出来事が字幕で現れる。



やがて政府を批判するデモ隊も加わり、市民のメッセージは徐々に政治性が強くなる。たとえば、トレド(当時のペルー大統領)やアンドラーデ(当時のリマ市長)を名ざしで非難するものも。12時から始まったこの落書きは、1時45分には政府に見つかり、不満に思った政府は2時15分にはメッセージの消去を告げる。チョークを集めてトラックに積み込み、2時30分には清掃部隊が到着し、バケツやホースで水をまきながら、ほうきやブラシでメッセージを消し去った。

1998-

## ケンタッキー州ホワイツバーグ(アメリカ合衆国)

DJ のニック・スペーラが、ア巴拉チア地域で唯一のヒップホップ・ラジオ番組を開始すると、近隣にある2つのスーパーマックス刑務所の囚人たちから、自分たちが刑務所内で経験したレイシズムや人権侵害を詳しく書いた手紙が彼のもとに届き始めた。それに対して彼は、囚人たちとラジオ・チェスゲームを始めることが応じた。それは、彼らのつらさを理解し、つかの間の息抜きを与えるという控えめなジェスチャーだった。まもなくスペーラは、さまざまなアート・プロジェクトを通じて、囚人自身の声を放送するようになった。たとえば、詩の朗読コーナー、ラップ・セッション、ヒップホップ・アーティストや地域のマウンテン・ミュージシャン（ア巴拉チアに独特のカントリー音楽の演奏家）とのコラボレーションなど。番組のある回では、一人の囚人男性が、母親の死の直後、兄弟への長電話を韻を踏んだ詩で表現する。またある回の「家からの電話」と題するコーナーでは、母親が服役中の息子に向かって、家族イベントの最新情報を報告し、毎朝の彼女の日課を描写する。

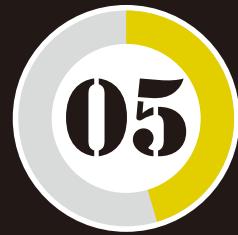
その後、このラジオ番組は《千の凧》という“全国的対話プロジェクト”に発展し、ケンタッキー州ホワイツバーグに拠点を置くNPOとなって、刑務所制度の中で発生する不正義を透明化することを第一に、全米に刑務所改革を提言している。スペーラをリーダーとするこの組織の名前は、メッセージを送ることを意味する刑務所用語“shoot a kite（凧を投げる）”から取ったものだ。《千の凧》プロジェクトの中心はウェブサイトで、そこには囚人をはじめ、彼らの家族、活動家、アーティストたちの物語がビデオやラジオ番組、ブログ、手紙書きキャンペーンなどのかたちでアップされている。さらに、新聞記事の抜粋、法律改正に関するプレスリリース、刑務所を維持する経費の増大を寸劇で説明する“We Can’t Pay the Bill”といった教育的コンテンツもある。

《千の凧》は、40年にわたってア巴拉チア地域のアートを支援し、地元の伝統を記録し、この地方の住人についての固定観念をなくすために努力しているNPO「アパルショップ」のもとで運営されている。

Up the Ridge  
0:53:44

《千の凧》プロジェクトの一環として制作された、米国ヴァージニア州ウォレンズリッジ州立刑務所の実態を、囚人や囚人家族、刑務所周辺住人などの声を通して描いたドキュメント映画である。

この刑務所は、1999年、近隣刑務所の定員オーバーを解消するための施設として建設されたもので、囚人の収容問題を解決するとともに、地方都市の経済を潤す効果をねらったものだった。しかし、刑務所内の実態は、施設や体制の新しさの謳い文句からは想像もできないほどの、過酷で残虐なものだった。囚人の家族は、山奥の刑務所に面会に行くために膨大な時間とお金を費やす必要ならず、また、彼らが垣間見る刑務所内のありさまは非人道的なものだった。囚人への人権を無視した身体的、精神的な暴力行為や人種差別は、結果として囚人の自殺を招いてしまう。アメリカの囚人投獄システムで大きな経済的利益が生まれる裏には、刑務所内での非道な実態がある、という問題が、全体として描かれている。



1969年に、ジョンソン大統領の「貧困との戦い」政策の一環として、ア巴拉チア地方の中央に位置するケンタッキー州ホワイツバーグに設立された、メディア・アート・教育センター。疲弊したア巴拉チア地方の若者にメディア技術を身につけさせ、他地域での就職につなげることが当初の目的だったが、訓練生たちはそのスキルを活用して、自分たちの地域のドキュメント映画を作り始めた。以来、40年以上にわたってプログラムの分野は、映画、ビデオ、レコードイング、文芸、演劇、ライブ・パフォーマンス、ラジオ放送まで広がり、地域の歴史、文化、社会問題などをテーマにさまざまな表現活動を続けている。

《千の凧》プロジェクトの創始者、ニック・スペーラは、オハイオ州トレド生まれ。1998年にア巴拉チアに移住し、アパルショップの一事業のFMラジオ局WMMTで、ヒップホップ・ラジオ番組『Lights Out』のホストを務めた。

《千の凧》は、2006年に、クリエイティブ・キャピタル（全米のアーティストの創造的活動を支援するNPO）の「Emerging Field」部門で助成金を得ている。

写真：活動家たちが簡易ビデオカメラの使い方を研修している様子



## ウィメン・オン・ウェイブ Women on Waves 中絶船プロジェクト Women on Waves

2001-

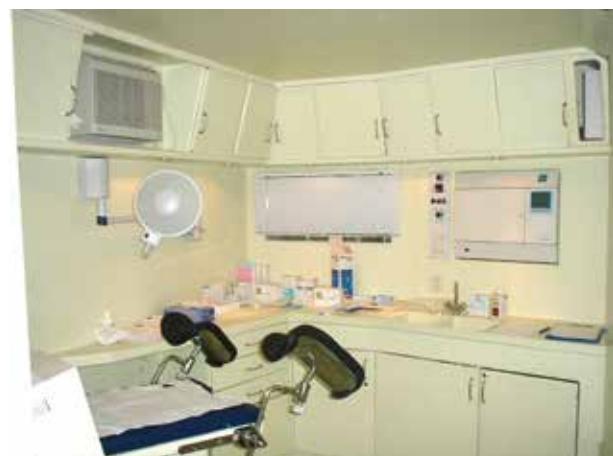
### オランダ発世界各地

ウィメン・オン・ウェイブの創立者でディレクターのレベッカ・ゴンパーツは、1966年スリナムのパラマリボで生まれ、オランダのフリシンゲンで育った。アムステルダムで医学とビジュアルアーツを学んだ後、中絶医となり、グリーンピースの船「虹の戦士号」に乗り組み、医師・環境活動家として航海。南アメリカを航海中、安全で合法な中絶を受けられないために苦しんでいる多くの女性たちに会い、その物語に刺激されてウィメン・オン・ウェイブを立ち上げた。

ウィメン・オン・ウェイブは、アーティスティックな表現がメッセージを伝える効果的な手段になるという信念から、美術家、デザイナー、映像作家、キュレーターなどと積極的にコラボレートしている。

ウィメン・オン・ウェイブは、2001年に船を出すかなり前から、波風を立てていた。医師レベッカ・ゴンパーツ率いる、この女性の健康管理のための権利擁護団体は、妊娠中絶をそれが非合法とされている国で提供することをめざした。彼女らは、オランダ船籍の洋上クリニックを建造し、目的国に向かって航海し、港から12マイル離れた公海でいかりを下ろし、オランダの法律に基づいて、乗船した女性に対して安全に中絶手術ができるようにした。しかし、これを知ったメディアは騒ぎ出し、激しい抗議行動を引き起こした。ポルトガルに近づいたときは軍隊が介入し、ポーランドでは、偽の血液や卵が投げつけられた。実際、洋上での中絶手術が行われたことは一度もなく、船内でなんらかの中絶処置を受けた女性は50人に過ぎないのだが、「この船は多くの論争を生み出しました。そしてそれがキャンペーンにとって重要なのです」と、ウィメン・オン・ウェイブのプロジェクト・マネージャー、キンヤ・マンダースは言う。「私たちはこれまでたえず議論を巻き起こし、中絶は単なる健康問題ではなく、社会正義の問題だというメッセージを発信することを目的としてきました」。

健康管理の専門家とアクティビストからなるこの小さなチームは、2008年まで船上で、避妊器具や妊娠テスト、性病についての知識を提供し、経口妊娠中絶薬（RU-486）の処方を行ってきた。航海はもう終えたが、ウィメン・オン・ウェイブは、組織のルーツがアートにあることに敬意を表して、その船を国際展覧会で展示している。初期の資金を提供したのはモンドリアン財団だったし、ゴンパーツは、医学校に進む前に、芸術で学位を取得している。マンダースは言う。「私たちは、アクティビズムとアートの関係、そして危険にさらされている状況に創造的でコンセプチュアルな解決方法を見出すことに、興味を持ち続けてきました」。この組織は現在、オンラインで存続し、安全に自分でできる中絶を女性たちに教えている。経口妊娠中絶薬の入手の仕方、中絶の前後にどこで正確な情報を得、カウンセリングを受けられるか——こういったことは、医学的には問題はないが、政治色の強い行為である。このウェブサイトには、年間200万のアクセスがある。



ヴァレンシア入港シーン  
0:02:50

このビデオはスペインのヴァレンシアの港に中絶船が入港したところ、湾岸巡視船が船を邪魔しに入った様子を一部始終撮影している。中絶賛成派と反対派、そしてメディアが入り乱れて港が混乱している中、医師でウィメン・オン・ウェイブのリーダーであるレベッカ・ゴンパーツは、ノースリーブのワンピース姿でさっそうと船に乗る。彼女は船を出港させ、反対派が陸で船を引っ張るロープを解き放つ。陸では反対派が「お前たち皆、テロリストでファシストだ！」と野次を飛ばすが、それでもなお、彼女は巡視船が無理矢理に船に取り付けたロープをナイフで断ち切るのであった。そして賛成派の拍手喝采のもと、帆を揚げ、公海へと船を進めていった。

# テレルヴォ・カルレイネン&オリヴァー・コフタ=カルレイネン

Tellervo Kalleinen and Oliver Kochta-Kalleinen

## 不平合唱団 Complaints Choir

2005-

世界各地

『不平合唱団』の創立者、テレルヴォ・カルレイネン&オリヴァー・コフタ=カルレイネンはさまざまに不満を聞いた。「私の夢は退屈だ」「私の祖母は人種差別主義者だ」「私の寝室の上で、隣人がハンガリアン・フォークダンスをしている」「私は太って、怠け者で、半分年寄りだ」。フィンランドのヘルシンキに住むこの2人のアーティストは、2005年から、自分たちの不平不満を合唱して、公開の場とオンラインで発表するよう人々に促してきた。そのプロセスはシンプルだ。まず、人々を集める。次に、良い音楽家を見つける。彼らの不平不満を出してもらい、韻を踏んだ歌詞にし、リハーサルした後、参加者たちは、レコーディングして「Complaints Choir」ウェブサイトに投稿する。このサイトは、日本からシカゴまで、投稿ソングの数々の収納庫になっている。合唱される不平不満は、明らかに政治的なもの（たとえば、ブラジルの小さな町での社会的不正）から非常に個人的なもの（たとえばセックスの妄想癖）までさまざまだ。しかし、カルレイネン&コフタ=カルレイネンは「私の、個人的なことはきわめて政治的でもある」とウェブサイトに書いている。「『私はヒマだ！』というのは個人的な悲劇に見えるが、生産サイクルに不用な人間を脇に追いやった資本主義社会の大きな欠陥を示している」。エジプトのカイロでの不平合唱は、大きな関心と観衆を集め、ローカル・バージョンの“クワイア・プロジェクト”に発展し、この地域での現在の政治状況についての考察や懸念を引き起こしている。

カルレイネン&コフタ=カルレイネンは、仕事中の不運な出来事や医者と患者の関係といった日常生活での体験をドキュメントする作品得意としている。彼らが最初に不平合唱団のアイデアを得たのは、フィンランドで、不平を言う人々の言葉が文字通り“不平合唱”に変わったのを聞いたからだという。2つのアート組織の支援を得て、英国のバーミンガムで最初のコーラスを行って以来、同様の取り組みが世界中に広まり、いまでは約140の不平合唱団が活動中である（2014年2月現在）。



テレルヴォ・カルレイネンは、1975年フィンランド、ロホヤ生まれ。オリヴァー・コフタ=カルレイネンは、1971年ドイツ、ドレスデン生まれ。

ビジュアル・アーティストの2人は、それ自身のプロジェクトを行うとともに、2003年よりコラボレーション・ワークにも取り組んでいる。その作品は、個人的な物語を使いながら、社会に共通する問題にメッセージを投げかけるもので、多くはビデオ・インスタレーションや映画として発表されている。《I love my job》(2007-2008)は、労働者がディレクターとなり、悪夢のような職場環境をファンタジックな短編映画に仕立てて訴えるもの。《People in White》(2011-2012)は、精神科の医師と患者の複雑な関係を10の事例で探求したビデオ・インスタレーション。

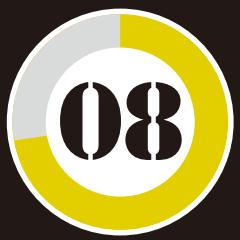


世界各都市の不平合唱団のパフォーマンス 0:20:49

このビデオには、ヘルシンキ、サンクトペテルブルグ、バーミンガム、シカゴ、シンガポール、東京、ヘルシンキ郊外のポイッキラクソ小学校、フィレンツェ、香港、フィラデルフィア、ブダペスト、ミラノ、ガブリオラ島（カナダ）で結成された不平合唱団のパフォーマンスが収録されている。

たとえば2009年に東京の森美術館で行われたコーラスでは、参加者は最初、あたかも仮面を暗示させるような医療用の白いマスクをしている。しかし、やおらマスクを外すと、日常生活や会社の上下関係、社会システムに対する不満を歌い始める。マスクという仮面を取った彼らは、匿名の存在ではなく、我慢することを止めた個人となって、社会に向かって高らかに問題提起する。





## ママリアン・ダイビング・リフレックス Mammalian Diving Reflex

### 子どもたちによるヘアカット Haircuts by Children

2006-

#### トロント(カナダ)他

ママリアン・ダイビング・リフレックスは、1993年設立のアーティスト・コレクティブ。カナダのトロントを拠点に世界各地で活動している。設立から2003年まではアーティスティック・ディレクター、ダレン・オドネルの舞台パフォーマンスが中心だったが、その後アートの幅を広げ、学校やコミュニティセンター、市役所、老人ホーム、国際アート・フェスティバルなどとのコラボレーションで、“社会の鍼治療(Social Acupuncture)”と称する、遊び心にあふれ、しかも挑発的な参加型パフォーマンスを行うようになった。

オドネルは、1965年カナダ、エドモントン生まれの作家、脚本家、パフォーマンス・アーティストで、都市計画の学位も持っている。2006年に著書『Social Acupuncture』を出版し、ママリアン・ダイビング・リフレックスの創造的方法論を確立した。

ある日、トロントのパークデイル・パブリックスchoolの5～6学年の生徒たちが、市内各所の美容院で、無料のヘアカット・サービスを行った。彼らは、プロのスタイリストの指導で、マネキンの長い髪を使い、前髪の切り方、カラーリングの仕方、襟足の剃り方、ロングレイヤーのカット方法、プロウドライヤーの使い方を1週間にわたって研修した。ヘアカット・サービスをする間、大人たちが見守っているものの、子どもたちは二人一組あるいはグループで、ヘアカラーを選んだり、髪の長さを決める“美的決定”を自ら行い、お客様のほとんどはこの新米美容師を信頼した。このプロジェクトは、世界各地に巡回した後、トロントに戻り、「ミルク・インターナショナルこどもアートフェスティバル」で2日間のパフォーマンスを行って最高潮に達した。

《子どもたちによるヘアカット》は、トロントを拠点とするアート&リサーチ集団、ママリアン・ダイビング・リフレックスが企画制作した。このグループは、公共空間において、人々の間に特定の相互交流を作り出すことを得意としており、たとえば、《アウト・オブ・マイ・リーグ》では、参加者は、“自分とはレベルが違う”と思われる見知らぬ人に近づき、会話することを求められた。《先生とスローダンス》は、ひと晩、高校の先生が生徒を相手にスローダンスを踊らねばならないというものだった。ママリアン・ダイビング・リフレックス（哺乳動物の潜水反射）というグループ名は、人間が極度の身体的圧迫を受けたときの自己防衛テクニックから着想を得たものだ。たとえば、体が突然水に沈んだり、凍えるような寒さに襲われたとき、生き延びるためにできるだけ酸素の消費を抑えようと、全ての主要な身体機能がほとんど停止状態まで低下することがあるのだ。これを見て、「ヘアカット」は、高度に専門化して個人的な表現形式あるいは労働を遂行する、10歳から12歳の子どもたちのイメージ（ただ「ませている」というだけではない）を、より大きなメッセージへと広げている。「もし、子どもたちが、創造的な思想家、意志決定者になれるほど自信をつければ、彼らも選挙権を与られていいんじゃないか？」



子どもたちによるヘアカット  
ノリッチ 0:14:23  
ロンドン 0:02:39

2010年、ママリアン・ダイビング・リフレックスの監修のもと、英国で《子どもたちによるヘアカット》が行われた。最初のビデオは「ノーザン・フェスティバル」のコミッショニングで実施されたもの。子どもたちが髪のカットやスタイリングを練習する様子、店を経営していく様子を記録している。アーティストがコンセプトについて語る場面や、学校で教師がこのプロジェクトに参加する意義などを述べている。

続くビデオは、ロンドンのLIFT(London International Festival of Theatre)のコミッショニングで行われたもので、子どもたちの様子とヘアカットしてもらう客の体験談が記録されている。子どもたちはスプレーを使って客の髪を染め、自分らしさを表現している。子どもを信じてスタイルを任せることや世代を超えたコミュニケーションの素晴らしさがここでは語られている。

アイ・ウェイウェイ Ai Weiwei

フェアリーテイル：1,001人の中国人訪問者

Fairytales: 1,001 Chinese Visitors

2007

カッセル(ドイツ)・中国



アーティスト、アイ・ウェイウェイは、ドイツのカッセルで5年ごとに開催される有名なアートフェア「ドクメンタ 12」に、1,001 人の中国人を本国から招いた。ドクメンタのスポンサー、スイスの3つの財団、ドイツの外務省から 414 万ドルの資金を得て、アイはこの旅行の全てを手配した。航空運賃を支払い、ビザを申請し、古い織工場を一時的な宿泊所に改装し、中国人の料理人を呼び寄せ、洋服や旅行鞄などトラベルアイテムをデザインし、カッセルの名所をめぐるツアーを企画した。彼はまた、展示パビリオンの床いっぱいに 1,001 脚のアンティーク椅子を並べ、カッセルにおける中国人の存在を表現した。彼のお客たちは、観光客であり彼の作品の主題として——外国の文化を見聞する人であり、他者の存在の証として、行動した。

アイが自身のブログでドイツへの無料の旅行を広告したところ、3日間で 3,000 件の応募があった。彼は、経済的余裕がない、あるいは旅行が制限されている人々を優先的に選んだ。たとえば、正規の身分証明書を持たない農村の女性は、今回初めて政府発行の渡航書類を手に入れることができた。他に、解雇された労働者、警察官、子どもたち、露天商、アーティストらが参加した。彼らは、200 人ずつの集団に分かれて、大挙して到着した。それでもアイは、個別のインタビュー録画と、長大なアンケート（個人の歴史や願望、空想など 99 間に及ぶ）を通して、彼ら個人個人の声を集めた。

カッセルは、この地方の寓話を集めたことで知られるグリム兄弟が長く暮らした街である。アイは、彼らの物語にちなんで、また、中国を離れるとは夢にも思わなかつた多くの旅行者がこの旅を神話のように感じたであろうことへの同意として、プロジェクトを《フェアリーテイル》と名付けた。



fairytales  
2:32:35

これは 2007 年の「ドクメンタ 12」に、アイ・ウェイウェイによってドイツのカッセルに招待された 1,001 人の中国人の様子を記録した約 2 時間 30 分にも及ぶドキュメンタリーである。アイ・ウェイウェイへのインタビュー、さまざまなバックグラウンドを持つ参加者の旅の準備の様子とドイツに着いてからの行動が主な内容だが、6月 12 日から 7 月 10 日の間、カッセルに滞在した中国人たちが、何をそれまでに体験し、考え、感じ、そしてその経験が何であつたのか物語る様子は興味深い。

1957 年中国、北京生まれ。  
1978 年北京電影学院に入学するが、1981 年に渡米し、ニューヨークを中心美術家として活動を開始。

1993 年に帰国し、現代中国を代表するクリエイターの一人として、美術、建築、デザイン、出版、展覧会企画など多岐にわたる分野で活躍している。特に、今回紹介した 2007 年の「ドクメンタ 12」と、2008 年北京オリンピックのスタジアム「鳥の巣」の設計におけるヘルツォーク&ド・ムーロンとのコラボレーションによって国際的な評価を高めた（しかし、後に五輪の政治プロパガンダ性を批判し、開会式を欠席した）。

彼はさらに、人権問題をめぐって中国政府への批判を強め、2011 年 4 月には北京空港で突然当局に拘束された。81 日後に保釈されたが、引き続き中国政府の監視下にあり、海外に出られない状態にある。現在、「監獄島」とも呼ばれる米国サンフランシスコのアルカトラズ島で、本人不在のまま展覧会が開かれている（2015 年 4 月 26 日まで）。

日本では 2009 年に、森美術館で「アイ・ウェイウェイ展 何に因って?」が開催されている。



## ヴィック・ムニース Vik Muniz ゴミ絵画 Pictures of Garbage

1998-2008

リオ・デ・ジャネイロ(ブラジル)

1961 年ブラジル・サンパウロ生まれ。現在はニューヨークとリオ・デ・ジャネイロを拠点に活動している。

若いころ、けんかの仲裁をしようとして脚を銃で撃たれたムニースは、その賠償金を使ってニューヨークへ行った。1980 年代後半からニューヨークを拠点に彫刻家として活動を始め、徐々に自分の作品を写真に撮ることに興味を持つようになった。彼の作品の特徴は、日常的にありふれたモノを素材に、美術史のページや報道写真などからモチーフを引用してタブローを制作し、それを写真に撮って発表するというもの。

「ゴミ絵画」のシリーズをはじめてブラジルで発表した、リオ・デ・ジャネイロ近代美術館での個展は、パブロ・ピカソ展に次いで、同館で2番目に多い観客動員数を記録したという。日本では、2008 年 11 月～2009 年 3 月に、トーキョーワンダーサイト渋谷で個展「ビュティフル・アース」が開催されている。

「私がしてみたいことは、人々が毎日扱っているものを素材に、彼らの生活を変えることです」と、アーティスト、ヴィック・ムニースは、彼の写真作品シリーズ『ゴミ絵画』の制作過程を追ったドキュメンタリー映画『ごみアートの奇跡 (Waste Land)』の中で言う。2008 年、ヴィック・ムニースは、リオ・デ・ジャネイロ郊外にある、321 エーカーに及ぶ南米最大の露天ゴミ処理場「ジャジン・グラマーショ」のゴミ拾い人たちと共同作業をするため、生まれ故郷のブラジルに旅した。ゴミ拾い人は、毎日届くゴミの中から、再生可能なモノを探して売るという、非公式で周縁化された仕事をしている。ムニースは、集めたゴミを材料に使って、彼らをモデルに巨大な肖像画を制作しようと、ゴミ拾い人たちに協力を求めた。その結果、古典的な肖像画が魔法のように出現し、そこでは、貴金属、あるいは厚塗りの絵の具のように見えるゴミの中で、彼らが神話上の存在に高められることになった。

ムニースは、アートで労働者のイメージを高めただけではなく、全ての協力者に労賃と提供してもらった材料の代金を支払った。そして、作品をオークションで売り、彼の取り分を、ゴミ拾い労働者の代表組織、ジャジン・グラマーショ・ガベージ・ピッカーズ・アソシエーションに寄付した。さらに重要なことに、彼は労働者たちと協働を続け、ブラジルにおける正式なりサイクル事業の立ち上げや、彼らの労働を広く人々に知らしめ、歴史的に過小評価されてきたコミュニティに尊厳を持たせることに一役買ってきた（その後、2012 年に、34 年間ゴミを堆積し続けたジャジン・グラマーショは閉鎖された）。

『ゴミ絵画』は、ムニースの作風を象徴するものだ（シロップ、バターピーナツから小さな置物まで、日常的な素材を使って作った《trompe l' œil (だまし絵)》もこれに近い）。彼はゴミ絵画の写真作品を制作するために、2 年間ゴミ廃棄場で過ごした。これらの作品は、世界中で展示されてきている。ムニースはニューヨークのブルックリンを拠点としているが、ブラジルの非営利団体、特に、恵まれない子どもたちに訓練や教育を提供する団体を支援している。



『ごみアートの奇跡』予告編  
0:02:16

このビデオは、第 83 回アカデミー賞長編ドキュメンタリー部門にノミネートされた映画『ごみアートの奇跡 (Waste Land)』(2010) の予告編である。

普段私たちが見たくないモノ、できれば隠しておきたいモノで何か作品を作つてみたいという意図から、この「ゴミ絵画」計画は始まった。ムニースは、ジャジン・グラマーショで働くゴミ拾い人（カタドール）と共同作業をしながら、時には主導権を人に与えることで悩みながら、この作品を作り上げていった。そして、作品を販売した利益をゴミ拾い人に還元するとともに、ゴミ拾いを続けながらリサイクルの重要性を訴える人々の存在を世の中に知らしめていった。作品のモデルとなった人々はこの経験が契機となり、ジャジン・グラマーショ閉鎖後もまっとうな仕事についているという。しかしそれで全てが解決したわけではなく、今後の課題もまだまだ残されている。





バスラマは、2001年にマドリッド建築学校の学生が設立した、廃棄物とその再利用を考える実験室である。以来、グループは（今では、プロの建築家、デザイナー、都市計画家の集団となって）、コミュニティと協働で、どんなゴミをどのように取り扱い、そこからどのように我々が世界を見ているのかを明らかにしようとしている。グループの活動の多くは、ワークショップや講演やディスカッション・フォーラムの形をとる。しかし、バスラマの実践活動の中心は、実際に廃棄物を集め、それを素材に使って、パブリック・スペースを再生することだ。たとえば、リマでは、廃線となった鉄道を再生するために、地元のアーティストやコミュニティの人々を誘い、線路に沿って遊園地を作った。マイアミでは、学校の生徒の協力を得て、古い自動車部品から楽器を作った。

バスラマは、2008年から、世界中の多くの都市で、こういった活動を《廃棄物プロジェクト》シリーズとして行っている。ヨルダンのジャラシュの難民キャンプでは、パレスチナ難民とともに、子どもたちの遊び場や休養のための日陰エリアを作った。ブエノスアイレスでは、廃棄された段ボールを使って、仮設のスケート場を作った。「我々はこうした制作過程で、ギャップを見出していく。それは、我々が資源を扱う方法だけでなく、考え、働き、現実を認識する方法について疑問を投げかけるものです」とバスラマは言う。



RUS  
0:15:07

序盤からテンポの良いラテン系音楽にのって、バスラマの制作活動の様子が映し出される。2008年9月のメキシコの海岸では、水色、白、青、緑の巨大な飾りモールのようなものを吊るし上げる作業と、やぐらの組み立てが並行して行われる。モニュメントは完成するが、同時に「あのモールは何なのか」という疑問が残る。それは次のシーンで解決する。バスラマはトラックを走らせメキシコの田舎の村におもむき、そこにある広大なゴミの山から、水色や白の洗剤容器のようなボトルを大量に収集する。そして、それを色別にわけて洗浄し、穴をあけ糸を通して。先ほどのモールはこうして作られたのだ。

次の場面はマイアミの廃車置き場だ。バスラマは廃車の周りを歩き、エンブレムを次々と取っていく。ほかの部品も回収し、彼らはそれらを全く別のものに作り変える。それらは小学校に運ばれ、子どもたちは芝生の上に置かれた座席に座って、廃車の部品、いや作品を演奏して遊んでいる。車の廃品も、バスラマにかかれば楽器に変わってしまう。軽快な音楽もあいまって、今度は何を作るのだろう、何を使うのだろう、とワクワクする気持ちが、普段は気にかけないゴミに対しての興味をわき起こさせる。



今から10数年前、マドリッドの建築学校で、決められたカリキュラムに従うだけでは満足できなかった学生たちが、さまざまなアクティビティを組み合わせて、創造性とリサイクルのアイディアに基づく活動を開始した。こうして、2001年にバスラマが結成された。

Basuramaとは、スペイン語で廃棄物を意味する「basura」と愛するという意味の「amar」を合成したもの。彼らにとっては、捨てられたタイヤやペットボトル、段ボール、ポリ袋までもが“資産”となる。その活動の目的は、消費社会の大量生産の結果としての廃棄物について、人々が議論し、省察することである。彼らは、スペインのマドリッドを拠点に、ラテンアメリカ諸国をはじめ世界各地に出向き、打ち棄てられた、場末の都市空間を、人々がそこで過ごしたいと思うような場に変身させる試みを続けていく。

## 公募！

日本発 社会派アートの進行形を考える

### SEA (Socially Engaged Art) アイディア・マラソン

プロジェクト案のプレゼンテーションを募集します！

展覧会「リビング・アズ・フォーム（ノマティック・バージョン） ソーシャリー・エンゲイジド・アート [SEA] という潮流」を契機として、日本においてはどのようなSEAが求められ、どのように実践していくべきかを考える場として、SEAマラソンを開催します。

これは、地域の具体的な課題や社会問題に取り組んだり、将来に向けての提言を行うアートプロジェクトのアイディアを次々にプレゼンテーション（口頭発表）する公募展です。SEAの現在と未来について、プレゼンターとオーディエンスがともに考えるプラットフォーム形成をめざします。

▶開催日・場所：2015年3月14日（土）13:00～21:00 3331 Arts Chiyoda（予定）

▶応募資格：SEAに関心のある方ならだれでも応募できます。個人でもグループでも可。（日本語でプレゼンテーションできる方に限ります）

▶公募期間：2014年12月10日（水）～2015年2月6日（金）

▶応募方法：応募フォーム（応募者情報、プロジェクト名、コンセプト、計画概要、アートと社会に関する考え方などを記入）+添付資料（形式自由）を基本的にデータでメール送信。データ以外で送る必要がある場合は郵送可。

▶応募フォーム：詳細は12月初めにアート&ソサイエティ研究センターのウェブサイトにアップします。

▶エントリー料：無料（ただしプレゼンテーション料は3,000円）

▶審査：書類（データ）審査でプレゼンターを決定（20名程度）

▶プレゼンテーション：各自持ち時間15分+質疑5分

#### ▶プレゼンターの特典

・各プレゼンテーションは2015年5月発行予定のSEAマラソン記録集へ掲載し、プレゼンターに贈呈します。

・アート&ソサイエティ研究センターで運営するP+ARCHIVEのウェブサイトに各プレゼンテーションをアーカイブ+広報し、将来的な実現をめざします。

・ニューヨークのアートNPO、Creative Timeのウェブサイト内でリポートされる可能性があります。

お問い合わせ：特定非営利活動法人アート&ソサイエティ研究センター

email: info@art-society.com

website: <http://www.art-society.com/>

表紙写真：ヴィック・ムニース《ゴミ絵画》

裏表紙写真：デレル・ヴォ・カルレイネン&オリヴァー・コフタ=カルレイネン《不公平合唱団》

編集：

秋葉美知子、工藤安代、清水裕子

Editors

Michiko Akiba, Yasuyo Kudo, Hiroko Shimizu

編集アシスタント：

佐藤彩乃

Editorial assistant

Ayano Sato

デザイン：

高野和哉

Editorial design

Kazuya Takano

助成：

特定非営利活動法人Japan Cultural Research Institute

Supported by

Nonprofit Organization Japan Cultural Research Institute

制作・発行：

特定非営利活動法人アート&ソサイエティ研究センター

〒101-0021 東京都千代田区外神田6丁目11-14

3331 Arts Chiyoda 311E

Published by

Nonprofit Organization Art & Society Research Center

#311E, 3331 Arts Chiyoda

6-11-14 Sotokanda Chiyoda-Ku Tokyo 101-0021

©2014特定非営利活動法人アート&ソサイエティ研究センター

website: <http://www.art-society.com/>

本書の全部または一部を無断で転載・複製することを禁じます。

©2014 Nonprofit Organization Art & Society Research Center

website: <http://www.art-society.com/>

All Rights Reserved.